

私たちが今、できること



やない
矢内道彦さん
クリエイティブディレクター



野崎洋光さん
「分とく山」総料理長

震災から5年が経過し、支援す

る側もされる側も、次の段階へ進

もうとしています。前を向いて歩

んでいる方々にエールを送るとと

もに、それを支える側は何ができ

るのかを、改めて考えたいと思

います。

東日本大震災の発生直後から

「食」に関係した支援活動を精力的

に続けている日本料理店「分とく

山」総料理長の野崎洋光さんと、

福島県人バンド「猪苗代湖ズ」と

してチャリティーソングをリリー

スするなど、多岐にわたる活動で

復興支援を行っているクリエイティ

ブディレクターの矢内道彦さんは、

ともに福島県のご出身。お二人に

東北への想いや現状の問題点、今

後の取り組み方などについて語っ

ていただきました。お二人のお話

が、豊かな明日を作るヒントにな

ること、希望へのメッセージにな

ることを願って。

野崎 「自分たちがトップランナー」。いい言葉ですね。確かに、この体験は今後の「教科書」になりうると思います。ところで私は福島県に食の大学を作ろう、と考えているんです。生産、物流、加工まで全部を網羅できる大学です。ある意味、「食」が一度ダメになったからこそ、その体験を踏まえて、新しい「食」の形を総合的に作り出す場を作りたいのです。

箭内 いいですね。とてもいいアイデアだと思います。

野崎 ふだんから親戚付き合いをしていれば、たとえばお米が手に入らなくて困った時でも、優先して送ってくれますよ。互いが助け合える、という関係がいいんです。支援している、されているという関係は、される側も意外とつらい付き合いの延長線のほうが、お互いに楽だと思うんです。

箭内 多くの人々に、現在の様子を伝えることも大切だと思います。災害や復興の詳細を知らない全国の人はもちろん、被災地側の人た

なりたいて考えていました。どうしたら県民の方々が心強いと思ってくれるだろうか、楽しい時間を過ごしてもらえのだろうか、という発想で活動してきました。ですから、あえて役場や県庁などは距離をおいていたのです。それが4年経ち、県民と役場・県庁などとの間にある溝がすくもつたのではないと思いはじめました。行政の方はすくも努力されているし、生産者の方々は、努力のたまものがある農林水産物がまだまだ誤解を受けていて、苦労されている。

そうした両者の姿を傍観するのでなく、私の強みである「広告」という手法でお役に立てないかと思ひ、最近では行政と県民の間に入って活動しています。

野崎 それはすばらしいことです。私も「食」に関する事で、携わっていきたくと思っています。これまでは「食」に関する民間の復興支援イベントによく招かれたのですが、今後は自らが主体的にできることをやっていこうと考えています。もつと生産者に寄り添う活動がしたかったものですから、具体的には年に3回、東京から被

ちにも。同じような立場の人たちが、現状を知ることや勇気や元気をもらえる気がするんですよ。それぞれが孤軍奮闘している感覚の時期があったと思うので。

野崎 他の人たちがどのように頑張っているかが分かりますからね。

箭内 東北の人たちの体験や取り組みの全てがロールモデルになっていく。それを知ること、「自分も同じことができるのでは」という自信にもつながるので、そういう機会を減らしたくないですね。

野崎 阪神・淡路大震災の復興イベントも半分に減っていったというし、今後、東日本でもそういう時期に入ってくるでしょうから。

箭内 それから、震災発生当初には何もできなかった人も、5年ぐらい経って初めて何かやろう、訪ねてみよう、ということではないと思っ

「トップランナーとして 経験を力に」(箭内さん)

やない・みちひこ
1964年福島県郡山市生まれ。広告代理店博報堂を経て2003年、「風とロック」を設立。数々の話題の広告を手掛ける一方、テレビの司会、ロックバンド「猪苗代湖ズ」のギタリストとして復興支援のためチャリティーソングをリリースするほか、数々のイベントなどを通じて支援活動を行う



2月15日に公開された『みらいへの手紙〜この道の途中から〜』は福島に存在するさまざまな思いを伝える、実話に基づくオムニバス形式のドキュメンタリーアニメーション。箭内さんはこの地方自治体初のアニメ制作プロジェクトに参加。写真は制作発表会で福島県知事の内閣雅雄さん(中央)、アニメ総監督の福島ガイナックス・浅尾芳宣さん(右)と

周りに伝えることが大切。 今後は斬新なアイデアを

野崎 私は今回、東北が経験した未曾有の大災害からの復興という課題は、今後、特に大都市で起こったときのモデルになるのではないかと思っているんです。

箭内 災害は全国で起こりうる。それを先んじて体験して対処する方法を学んだトップランナーだった、ということかもしれませんね。これからは、被害によるマイナスをゼロに戻す以上のことをやっ

ていかなければなりません。だから「食べて応援」にしても、「こんなにおいしいものを作ったのだから、食べないともつたないですね」と言わせるぐらいの段階に入っているような気がします。そういう誇りや自信を大事にするべきではないかと。

野崎 「自分たちがトップランナー」。いい言葉ですね。確かに、この体験は今後の「教科書」になりうると思います。ところで私は福島県に食の大学を作ろう、と考えているんです。生産、物流、加工まで全部を網羅できる大学です。ある意味、「食」が一度ダメになったからこそ、その体験を踏まえて、新しい「食」の形を総合的に作り出す場を作りたいのです。

箭内 いいですね。とてもいいアイデアだと思います。



東北への熱い思いから、アイデアが尽きないお二人。「素材はいろいろとあるので、一緒にやってみよう！」と力強い言葉が

関わっている中で感じる 地域再生の現状

箭内 以前からお話してみただった、同じ福島県出身の野崎さんにお会いできてうれしいです。

野崎 こちらこそ。箭内さんの活動は、テレビなどでよく拝見しています。

箭内 2011年6月から『福島をずっと見ているTV』という番組(NHK Eテレ)を続けています。15年4月からは福島県のクリエイティブディレクターにな

「食の持つ可能性を 未来につなげて」(野崎さん)

野崎 私は生まれが福島県で、以前から三陸をはじめ、岩手県、宮城県にもよく出入りしていました。ですから、震災はいわば親戚が事故にあつたようなもの。「どうしても東北に行かなければ！」という強い思いにかられ、仲間の料理人たちを何人か連れて、炊き出しから始めたんです。結局、現地で食の提供をすることが、自分の気持ちが一番落ち着くことでした。

箭内 私は最初、県民側の味方に

なりたいて考えていました。どうしたら県民の方々が心強いと思ってくれるだろうか、楽しい時間を過ごしてもらえのだろうか、という発想で活動してきました。ですから、あえて役場や県庁などは距離をおいていたのです。それが4年経ち、県民と役場・県庁などとの間にある溝がすくもつたのではないと思いはじめました。行政の方はすくも努力されているし、生産者の方々は、努力のたまものがある農林水産物がまだまだ誤解を受けていて、苦労されている。

そうした両者の姿を傍観するのでなく、私の強みである「広告」という手法でお役に立てないかと思ひ、最近では行政と県民の間に入って活動しています。

野崎 それはすばらしいことです。私も「食」に関する事で、携わっていきたくと思っています。これまでは「食」に関する民間の復興支援イベントによく招かれたのですが、今後は自らが主体的にできることをやっていこうと考えています。もつと生産者に寄り添う活動がしたかったものですから、具体的には年に3回、東京から被

ちにも。同じような立場の人たちが、現状を知ることや勇気や元気をもらえる気がするんですよ。それぞれが孤軍奮闘している感覚の時期があったと思うので。

野崎 他の人たちがどのように頑張っているかが分かりますからね。

箭内 東北の人たちの体験や取り組みの全てがロールモデルになっていく。それを知ること、「自分も同じことができるのでは」という自信にもつながるので、そういう機会を減らしたくないですね。

野崎 阪神・淡路大震災の復興イベントも半分に減っていったというし、今後、東日本でもそういう時期に入ってくるでしょうから。

箭内 それから、震災発生当初には何もできなかった人も、5年ぐらい経って初めて何かやろう、訪ねてみよう、ということではないと思っ



野崎さんの震災直後の初めての活動は炊き出し。「とにかく行きたいという思いでかけつけました。仲間の料理人たちも一緒に行かせてくれと言って。ありがたかったですね。これからも食に関することで応援していきたいです」と野崎さん。写真は福島県須賀川市での炊き出しでフレンチ「ラ・プランシュ」田代和久さん(左)、「天ぶら天真」榎山真栄さん(中央)と。3人とも福島県出身



のざき・ひろみつ
1953年福島県石川郡生まれ。1989年日本料理店「分とく山」を開店、総料理長に。伝統の日本料理界に新風を吹き込み、斬新なアイデアと分かりやすい解説で新聞、雑誌、テレビでも活躍する。震災後は炊き出しなどで東北を支援。現在は福島県ブランド認証制度委員など多くの活動により、食の復興に貢献している